12　ヒヤ潟の由来

国見峠を南に少し下ると、シラカバに囲まれた周囲二〇〇メートルばかりの「ヒヤ潟」と呼ばれる小さな沼がある。

昔、沼のほとりに、どこから来たのか父と娘が粗末な小屋を作り住んでいた。父は武士であったらしいが、何か深い訳があり、山中に身を潜めていたのであろう。

山で狩りをしては、ときどき里に下り、食べ物に変えて暮らしていた。時には娘も一緒について行った。娘は、大きくなるにつれて里で見た機を、自分でも織ってみたくて仕方なかった。

こんな娘をみて父は、ある日、里でやっと古い機を譲り受けてきた。しかし、それには肝心の梭（機織りで横糸を通す時に使う道具のこと）がついていなかった。

「梭さえあれば……」と娘は毎日そればかり考えていた。

ある日、娘は沼に水を汲みに行き、澄んだ水の底に梭の形をした白く光る木を見付けた。小枝でそれを引き寄せすくいあげてみたが、梭ではなかった。でも、ちょうど手ごろな大きさだったので、娘は喜んで家に持ち帰った。そして、父に細工してもらい、いよいよ機を織りだした。

この梭はおもしろいようによく滑り、それは、小鳥のさえずりのように心地好い音色をたてた。娘の歌う機織りの可憐な声と、この梭の微妙な音色が、山の中に美しく流れる日々が過ぎて行った。

ある日、娘がいつものように歌いながら機を織っていると、このあたりでは見たこともない、立派な身なりをした若者が訪ねて来た。若者は、今まで聞いたことのない美しい歌と珍しい梭の音に引かれて、尋ねて来たという。「どうかその梭を見せていただけぬか。」と、拒むことのできないほどの厳しい目をして頼んだ。娘は、おそるおそる若者を部屋に入れた。若者は、めざとくそこにある梭を見付けると、にわかに目をギラギラ光らせ、「お、俺の角だ！」と叫んだかと思うと、梭をわしづかみにして戸を破り、外に飛び出していった。夢中で若者の後を追った娘は、次の瞬間凍ったようにその場で立ちすくんでしまった。

草をかきわけ、今にも林に逃げ込もうとしているのは、恐しい姿をした竜であった。林を駆けぬけた竜は、水音高く、沼に飛び込んでしまった。娘がやっと駆けつけた時、水は異様に濁り、大きな渦が巻いていた。

「私の梭を返してー」娘は必死に叫んだ。血を吐くほど叫び続けた。そして、とうとう沼の中に飛び込んでしまった。

狩りから帰った父は、娘のいないのに気づき、探し回り、沼のほとりまでやって来た。そして、そこで見たのは、水際に残された娘の赤い草履だった。

それからというもの、この沼のほとりを、梭はもとより、梭に似た木を持って通っても、沼が荒れ、かならず禍が起きるという。……梭を嫌がる渦。「梭嫌渦」がなまって「ヒヤ潟」と呼ばれるようになったという。また、娘を哀れに思った人達は「機織姫沼」ともいったという。



今もひっそりたたずむ「ヒヤ潟」